農村開発・環境保全・女性自立

アニータ先生と先住民族学校（ILS）による苗木見守り活動への期待

ダグマ山系南端レイクセブ町辺境の５地区におけるアグロフォレストリー事業終了にあたり

2014年の６月、地球環境基金助成による事業実施のため、レイクセブ町辺境地域にあるティヌオスを訪ねた際に同行してくれたアニ―タ先生。道すがら土砂崩れ現場を示して、事業による土壌侵食防止効果への期待を語っていたアニータさんは、特に、PFP農業専門家の１人サムソンさんが2016年に病に倒れて、ニックさん一人では手が回らなった状況の中、代わりに、住民の指導に当たってくれました。研修や苗木定植などの作業現場の写真にも、しばしばアニータ先生の姿があります。

昨年９月末終了のレムズエル地区の事業での研修。左・紫のジャケットがアニータ先生

苗作りを子どもたちに教えるアニータ先生

３年前の会報78号P6でご紹介のように、アニータ先生は、SCMSIデコロンハイスクールで校長を務めるなど、長くチボリ民族の子どもたちの教育に携わってきました。2006年、SCMSI校も公立小学校も遠くて通えないタシマン村やタクネル村の年少児童（幼稚園―2年生）のために、先住民族学校（Indigenous Learning School）を３か所に設置しました。森との共存を教育理念に掲げて、特に熱帯林保護やゴミ問題などの環境教育に力を入れています。

ILS への入学条件はアバカの苗 10 本の寄付ということで、教室の近くにはアバカ学校農園が完成し、土壌浸食防止のほか、学校の収入源にもなっています

タシマン村は現在、軍の小隊が駐屯しています。隣接のネッド村の大規模開発企業の私兵の横行と、ムスリム地域とつながる幹線道路沿いにあり、イスラム過激派への警戒のためです。戒厳令が再々延長された現時点の状況をPFPに確認したところ、私たちのモニター実施は、コロナダル市郊外のボルールやレイクセブ町中心部は大丈夫であるが、タシマン村訪問は勧められないということでした。

現在実施中のボルールでの事業が６月末に完了すると、新たなアグロフォレストリー実施予定はツピ町のビラーンの村１件のみです。これからしばらくは、これまでの事業で植えた苗木が、環境修復と収入向上面で成果を上げられるように、維持管理について定期的にモニターする必要があります。タシマン地区については、アニータ先生をはじめとするILSの先生方に指導をお願いすることになりそうです。

ビラーン民族の村の持続可能な森林農業

― ボルールにおける緑の募金交付金事業・短信 ―

苗木搬入は、雨で道路が寸断され遅れていましたが10月までに完了

今月から、苗床での養生を終えた苗を定植しています。

ビラーン民族女性の伝統継承と収入向上事業

４月の事業開始の本事業は、助成機関 WE21 ジャパンみどりの承認をいただいて、次年度８月末まで期間を延長しました。「織の家」修理が遅れているうえ、アムグオ地区の織り手など女性の組織化もまだ進んでいないためです。

戒厳令下のアムグオの治安はあまりよくないということで、私たちの出張は今も予定が立たないため、PFPのビビアンさん、元COWHEDのジェマさんに協力を依頼し、指導にあたってもらうことにしました。スヌーリアは織りの家修理担当のみで、織や縫製研修は、アムグオの事情に通じている農業指導者ボニファシオが担当することになりました。